

あべこべ和尚の人相書
おしやう にんそうがき

昔、ある村にみんなからあべこべ和尚と呼ばれているお坊さんがいました。このお坊さんとはかく何でも人とはあべこべな事をする事で有名でした。それでも、みんなは本当に困った時にはこのあべこべ和尚のところに出かけては知恵を借りるのでした。

ある時このあべこべ和尚の隣の城下町で、立て続けに泥棒が入るといふ事件がありました。この泥棒は大金持ちの商人や金貸しなど、金がありそうなところばかりを狙って夜になるとこっそり忍び込み、土蔵から小判や金銀を根こそぎ盗んでいくのでした。そして盗んだ後には必ず極楽神社の守り札を家の中のいたる所に貼っているので、だれ言うともなくこの泥棒を「極楽小僧」と呼ぶようになりました。

「おい、聞いたかい。また極楽小僧が盗みに入ったそうだよ」

「今度はあの大金持ちの天満屋がやられたそうだよ」

「それにしても、極楽小僧のやり口は相変わらず鮮やか

だねえ。今度も一人も殺さずに、いつの間にかすっかりやられていたそうさ。」

「まあ、天満屋も日頃からあくどくもうけていたんだ。

これも天罰だよ」

町は、こんな噂でもちきりです。そして奇妙なことにだんだん極楽小僧の人氣があがってさえきたではありませんせんか。

さて、こちらは泥棒を取り締まる奉行所です。奉行の

大川文衛門はこの極楽小僧の思わぬ人氣にすっかり苦

きっていました。夜回りの手代を増やしたり、町中を聞

きまわる岡つ引きを強化したりと、思いつく限りあらゆる事をやってみましたがさっぱり効果がありません。

極楽小僧を捕まえる何の手がかりも得られないのです。

このままでは奉行所の權威も地に落ちてしまいます。

困り果てた文衛門は、最後にあべこべ和尚のことを思

い出しました。知恵者で有名なあべこべ和尚なら、何とかうまい手を考えだしてくれるかもしれない。文衛門はそう思ったのでした。

「ほうほう。そんな泥棒がいるのか。まあそういう悪さ

をする奴がおるから、奉行所も必要なわけじゃからのう。
世の中は持ちつ持たれつじゃて。」

しよげかえった文衛門の話を聞いたあべこべ和尚は相変あいかわらずあべこべなことを言っではにこにこ笑っています。

「しかし和尚さん。手前どもはそんなのんびりした事も言っておれないのです。何とか早く極楽小僧をお縄せつじやくにしないで、拙者は切腹しなければなりません。」

「おやおや、それはまた物騒ぶつそうな話だのう。それなら、何とかせねばなるまいて。」

あべこべ和尚はそう言っで、そばにあつた紙切れにさらさらと人間の絵と、何やら文字を描きました。

「まあ、切腹なぞと思いつめんと、この絵を百枚すぐらい刷っで、町の目立つところに立て札にして立てなさい。」

さすれば早晩さばん、お前さんのお役目も首尾よく果たせようて。」

「和尚さん。これは、何の絵でござりましょうか。」
「言わずと知れた極楽小僧の人相書きじゃよ。われながらそつくりすに描けたものよ。ほつほつほ。」

文衛門が見るとなるほどそこには、極楽小僧の人相書きしほきが描いてあります。神出鬼没でこれまで、顔はおるか声さえ聞いた者もない極楽小僧の顔を和尚はどうやって

知つたのだらう。文衛門は不思議に思いながらもその人相書きを貰つて奉行所に帰りました。

それから二三日経つてからのことです。町の人たちは

前にもまして極楽小僧の噂話に花を咲かせました。

「お前さん。極楽小僧の人相書きを見たかい。」

「おう、見たとも。これまで誰も知らなかつた極楽小僧の素顔を誰か見たものがあるんだねえ。何でも本物そつくりらしいぜ。これじゃあさすがの極楽小僧も逃げ隠れ出来ねえだらうな。何だかわいそうな気もするなあ。」
「それにしても、何だねえ。極楽小僧もひどい不細工な男だねえ。目は出目金のようなぎよる目に、かんながぶ

つこわれたような出つ齒、頭はぼさぼさで、独楽が回せ

るようなでつかい一文はげが二つもあるときてやがる。

おまけにあの足の短いこと。うぶぶ。思い出しただけで

も吹き出したくなるよ。」

「お前さん、笑つちやあいけないよ。極楽小僧が聞いていたら気の毒だよ。ひっひっひ。そ、それにしても本当

に珍しいぐらいの醜男だね。あんな醜男が、あの短い足で盗んだ千両箱をよたよた運んでいたんだねえ。ひっひっひ、あはあは、わっはっはっは。」

さて、こうした町の人たちの噂話を耳にしても、一人だけ話の輪にも入らず、にこりともしない一人の男がい

ました。年の頃は三十五、六。目鼻立ちはきりりと整い、役者にしてもいいような色男です。男は最初のうちこそ
そし

たびかさ

素知らぬふりをしていましたが、噂話が度重なるにつれ、
だんだん

段々顔がけわしくなり、必死になって心の中の何かと戦
ひたい
 っているようでした。額には青筋が浮かび、ぎりぎりと
 歯ぎしりまでしています。そして最後に男は「よしっ」

さけ

ぶぎょうしよ

か

こ

と一声叫ぶと。急ぎ足で奉行所に駆け込みました。

「やいやい。あの極楽小僧の人相書きの立て札を立てや
 がつたのはどこのどいつでい！」

ど

な

男は大声で怒鳴ります。

せつし

やし

「ああ、拙者であるが、何か用がおありかな？」

か

げん

「おおありでい。あんないい加減な人相書きなんぞ立て
 やがつて。奉行所だったら奉行所らしく、いんちきする
 のはやめねえかい！」

「おや。あれはいんちきではない。極楽小僧をよく知っ
 ている偉いお方に描いてもらった人相書きであるぞ。現
げん

と

ばいしよ

に町中の者の間で本物そっくりだと評判であるぞ。」

おお

おうそ

「それが、大嘘なんでい！ 極楽小僧はあんな変ちくり
 んじゃねえってんだよ。」

「なぜ貴公きこうにそれが分かるのかな。貴公こそでたらめを
言いつておるのであるう。それとも何か確たしかな証しやう拠こがある
のかな？」

「なぜつて……。この俺様おれさまが極楽小僧なわなんだよ！これ
以上に確たしかな証しやう拠こがあるつてのかい！お縄なわにするなら、
勝手にしろよ。おいらあ、逃げも隠かくれもしねえよ！
その代わり、あの人相書なまがらきだけは本物と取り替かえろよ。
それだけは約束たんかしろよ！」

男おとこはこう啖呵たんかを切きつてお白洲しやくしゆうにどっかと座まり込みました。
男おとこはそのままお縄なわになつたことは言うまでもありません。
ん。

「この度たびは、和尚殿おしやうどののおかげで面目めんもくをほどこしました。
これは些少せしやうではござるが、殿様とんやまがくださつたご褒美ほうびの金きん
子すでござる。どうぞお納めください。」
数日後すうじつごあべこべ和尚おしやうの所ところに出でかけた文衛門ぶんゑもんは、かしこま
つてお礼れいの言葉ことばを述べながら、真新しい紙かみに包くるまれた金きん
子すを差し出だしました。

「おやおや、小判せうばんかの。わしはそんなものいらんぞ。

金というのは不自由なものである。持っておればおるほど泥棒が心配で夜もおちおち寝てられないんじや。さあさ

あ、小判なんぞは持って帰った、帰った。」

あべこべ和尚は、相変わらずあべこべを言いながら、か
たかわら
んらからからと高笑いをしていたということです。